

- 1 報告地区：宗谷地区
 - 2 事例報告学校名：猿払村立浅茅野小学校
 - 3 報告者職・氏名：校長 三野宮 誠 一
 - 4 キーワード：地域住民の学習の場としての学校づくり
-

1 はじめに

浅茅野小学校は、猿払村役場がある鬼志別地区から約20km南に位置し、全校児童12名、学級数は4学級（特別支援学級1を含む）の学校である。大正6年に開校し、今年で102年目を迎える歴史と伝統ある学校である。歴代の教職員により地域に根差した教育活動が展開されてきたが、近年は特色ある教育課程を生かし、「地域住民が集う学校づくり」が進められてきた。現在行われている取組の一部を紹介する。

2 実践紹介

(1) 地域の産業に関する学習を通して

① チーズづくりの取組

本校には地域産業の柱の一つである酪農業について学ぶため、チーズ製造機が備品として配置されている。児童は生活科や総合的な学習の時間において猿払村の産業や食と健康について学習している。その中で、地域の関係団体から指導を受け生乳からチーズを製造する実習を行ったり、酪農業の現状や今後について学んだり考えたりする機会を設けている。児童の保護者の大部分は酪農業に携わっており、仕事の手伝いをしている児童も多い。当然、後継者となる児童も出てくると思われる。酪農業や猿払村の未来について考える貴重な機会となっている。

チーズ製造機については地域住民が使用することが可能となっており、村内居住者であれば学校に使用申請書を提出の上、課業日に使用することができる。（機械が設置されている家庭科室が授業で使用される場合は使用不可）酪農業を営んでいる保護者や地域住民が生乳を持ち込み使用しており、使用者同士が交流する場となっている。また、地域の団体による研修活動の場としても使われている。

② 石窯の使用

本校では石窯が敷地内に設置されている。前々任の校長が学校教育活動での使用とともに、地域住民が使用することを想定し、中心となって製作した。学校の教育活動の中では、総合的な学習の時間における食に関する学習の中の調理活動で活用されている。電気やガスを使用することなく調理することができる道具・手段として、環境教育とも関連付けた学習活動としている。薪は地域のご協力により豊富に用意されており、使用申請の上、地域住民が自らの活動に使用することがあれば、社会教育活動で使用されることもあり、地域における野外活動の場の一つとなっている。



【チーズ製造機】



【できあがったチーズ】



【石窯の中で焼かれるピザ】

(2) 特色ある教育活動を通して

① クロスカントリースキーの取組

本校は、王子グループの社有林である「王子の森」の中に位置している。許可を得た上で、林道や隣接する牧草地を利用し、職員が1周約2kmのクロスカントリースキーコースを整備している。特色ある教育活動として村教委からの支援を得ており、スキー道具やリースされたスノーモービルが配備されている。



【林間コースを滑走する児童】

この取組が始まった経緯としては、度々あるクマの出没のために児童全員がバス通学となっており、自宅が牧場のため冬場は特に外出がままならないことによる運動不足が見られたためである。学校の体育の授業ではクロスカントリースキーが取り込まれており、業間の体力づくりにも取り入れられている。このコースは地域住民にも開放されており、児童が使用していないときであれば、道具も含めて使用することができる。冬場の体力づくりのために利用する方がいれば、冬場の森の自然に触れるために利用する方もいる。

② そばに関連した取組（そば打ち）

村内ではそばの栽培が行われており、過去には本校の児童が地域住民の農地を借り、そば栽培に携わった歴史がある。現在児童による栽培は行っていないが、そば愛好団体から放課後を中心に複数回指導を受けた後、自分たちで打ったそばを高齢者を中心とした地域住民に振る舞う交流事業が続いている。地域住民と一緒に作業を行うこともあり、地域の実行委員会により学校を会場に休日に開催される「餅つきの集い」とともに、地域の大切な交流の場となっている。



【そば打ちを通じた交流事業】

③ 一般的な学校行事を通して

小規模校では一般的なことであるが、学校行事は地域住民が集う場としての機能を有している。運動会は地域運動会としての役割を担っており、種目の半分は地域種目である。老若男女が午前中、楽しく語らい、体を動かす機会となっている。学芸会は地域の児童の成長を喜び合う場となっており、子や孫がいない家庭からも多くの住民が参観に訪れている。

3 おわりに

おわりに二つのことについて言及する。一つ目は学校の地域における立ち位置についてである。言うまでもなく、学校は生涯学習機関であり、地域における生涯学習の場としての機能を発揮することが求められる。現在、学校における働き方改革が進められているが、教職員の負担とならないよう工夫しながら、かつ危機管理上の対策を万全とした上で、ハード面・ソフト面の双方において学校を開かなければならないと考える。村教委の指導の下、可能性を追求したい。二つ目は、地域連携における校長の立ち位置についてである。私の前々任の校長は、課業時以外でも多様な体験活動を行うことができる学校環境作りに励んだ。前任の校長は、体験できることを整理し、教育課程とのつながりを整備することに尽力した。私はこれまでの経過を基に、「地域とともにある学校」の理念や具体的取組の広報活動に力を入れ、地域社会から更なる協力・連携を得ることに努めた。「地域と連携すること」の実現には時間を要する場合もある。校長はそれまでの取組の経過や歴史を後任の校長に伝達し、明確な道標を引き継ぐ必要がある。校長としての長期的なビジョンをもち、発信を続けたい。



【地域住民による酪農に関する授業】